



【書評】(第11号から続く)

安田喜憲著『環境文明論—新たな世界史像』

(論創社 2016.3刊 4,800円+税)

安孫子昭二

Book Review

Shoji ABIKO



第7章 動物環境文明論

メドォーサの変貌にみる動物観の変遷

ヨーロッパでも日本でも、ヘビと人間との関わりは非常に歴史が古くて濃密なものがあり、ヘビにまつわる神話は数多くある。

著者は専門の花粉分析方法を通して、森と人間の関わりあいの歴史を研究してきたが、ギリシャの森林の変遷はヘビの問題を抜きには考えられないと認識するようになる。

ギリシャ神話にでてくるメドォーサは、髪の毛がヘビで、見る者を石に変える恐ろしい化け物とされている。メドォーサはゴルゴン神の三姉妹の一番下の妹で、たいへん美しい乙女であったが、知恵の神アテネと美しさを競って勝ってしまったために、アテネに嫉妬されて恐ろしい化け物に変えられてしまう。アテネの怒りはそれだけでは治まらず、ゼウスの子供ペルセウスに青銅の盾を与えて、メドォーサを退治させてしまうのである。

1984年に、著者は古代地中海世界の信仰の中心地だったトルコのデイディマ遺跡を訪ねたとき、神殿の柱の正面の梁に髪の毛はヘビでヘビのネックレスをしたきれいな顔のメドォーサの彫刻を発見する。それまでギリシャ神話で伝えられていた醜く汚い恐ろしい化け物だったメドォーサが、なぜ目の前の聖なる場所に飾られているのか。

ギリシャ神話が間違っているのではないかと疑問から、著者はヘビとメドォーサの研究に没頭し、『大地母神の時代』(角川新書1991)を

刊行する。

ギリシャ文明が繁栄した時代は多神教の世界観だった。古代ギリシャ世界では、メドォーサは病気を治す神、邪気をはらう力、あの世とこの世を循環する冥界の支配者として崇められていた。

初期のメドォーサは、ギリシャ文明の繁栄がはじまるB.C.8世紀くらいにでてくるが、たいへん怖い顔をしている。なぜ怖い顔をしているのか。著者は、ギリシャ時代初期の人びとが自然に対して、畏敬の念や畏怖の念をもっていたからではないかという。

ところが、ペルシャ戦争に勝利して黄金の繁栄期を迎えるB.C.5世紀以降、ソクラテスのような人間中心主義的な理性を尊ぶような哲学が生まれて、ギリシャの森が急速に破壊され、自然を圧倒するようになると、メドォーサは美しくなってくる。

その後、A.D.1世紀以降、地中海世界にキリスト教が広まって、大きな力をもつようになると、ヘビの地位が凋落するようになる。キリスト教では神は唯一、天にしかあらず、森やヘビやライオン、トラのような動物たちは人間の幸せのために存在するのであり、闘うキリスト像にヘビは邪悪、邪教のシンボルとして踏みしめられる。キリスト教の世界観が広がってくると、メドォーサは迫害されるようになる。

イスタンブールに、6世紀に造られた地下宮殿と呼ばれる巨大な貯水槽がある。1988年にその貯水槽の水が抜かれると、貯水槽の奥から二

つのメドォーサの顔が柱の台石にされて出てきた。しかし、この頃のメドォーサの顔はまだ神々しさを留めている。

ところが、近代ルネサンスがイタリアを中心に起こる15世紀以降になると、カラバッジョはヘビがうようよして気持ち悪いメドォーサを描き、ルーベンスは神々しさが全くない化け物としてメドォーサを描いている。著者は、人間中心主義とキリスト教を骨格とした近代文明のリアリズムが背負った闇があるような気がするという。

明治以降、私たち日本人は一生懸命に近代ヨーロッパ文明を学んできた。近代ヨーロッパ人が編纂したギリシャ神話のメドォーサは、そういう化け物と教えられてきたのである。

では、本来は神だったメドォーサが、なぜ化け物にならねばならなかったのだろうか。著者は、その背景にキリスト教の宗教的世界観が深く関わっていたことと、家畜と麦作農業をセットにしたヨーロッパの畑作牧畜民の農業体制が森を破壊したから、森に棲息するヘビは化け物にならざるを得なかったという。

12世紀から13世紀にヨーロッパは、水車・風車あるいは重輪鋤の開発などの技術革新がおこった。するとキリスト教の宣教師が先兵となって、多神教のドルイド教が信仰されてきたアルプス以北の鬱蒼としたヨーロッパブナやナラの森を大開墾していった。宣教師は森の悪魔と闘い、森の闇を切り開いてキリスト教文明をヨーロッパにもたらしたから、自然と人間の関係の価値観が180度転換するようになる。自然は人間の生贄になって、森の動物たちは住処が失われただけでなく、動物たちを神や神の使いとみなす人間の心も失われていったのである。

日本神話に登場するヘビ

縄文時代の土偶の髪の毛はヘビだった。身近にいるヘビは、一度死んだものを再生させる生命再生のシンボルとして、また一咬みで人間を倒すマムシのように人間の力をはるかに超えた存在として、あるいは激しい性のエネルギーと豊饒のシンボルとして、神と崇められていた。

ところが弥生時代になると、人間がヘビを退治する「ヤマタの大蛇」神話が登場するようになる。桜ヶ丘5号銅鐸にはヘビを追いかけて殺そうとする絵画が描かれている。またヘビにまつわる神話として、日本書紀には箸墓伝説があるし、常陸風土記にもヌカビコとヌカビメの伝説がある。

ヨーロッパの12～13世紀が革新の世紀だったように、日本でもこの頃に二毛作という農業方式が導入され、牛耕や鋤の普及、灌漑技術の革新などにより関東地方の大開墾が行われた。自然に対する人間の在り方もかなり大きく変化しているが、日本人は里山の二次林—アカマツ、コナラ、クリノキ、スギ等—の資源をうまく活用し、水田耕作農業に使ったのである。

森の破壊とヘビを崇拝する文明の崩壊

著者は若い頃、ギリシャ文明に憧れてギリシャやトルコの地中海沿岸の文明を研究して、長い間、日本の文明はギリシャ文明の足もとにも及ばないと思っていた。ところが、ギリシャに行ってみると山には森がなく、どこもハゲ山ではないか。どうして山に森がないのか。山に森がなくなったことが、ギリシャ文明やローマやトルコの文明の崩壊につながったのではないか、そう直観的に思ったという。

著者の研究分野は「環境考古学」という自然科学と人文科学の文理融合の学際的分野である。花粉分析の調査をすると、ギリシャ文明が発展する中で森の木はどんどん伐られて、なくなったことが明らかになった。森林が破壊されると表土が露出する。ヒツジやヤギを放って植林をしない土壌は雨で流出し、下流に運ばれた土壌は地中海河口の港町を埋め、埋まった湿地はマラリアの巣窟になった。著者は、そうした連鎖が古代地中海文明の人々の活力を奪い、文明を崩壊させる要因になったと考える。

古代ギリシャ文明の一つ、クレタ島にクノッソス神殿がある。そこから「生きたヘビを飼う容器」が出土している。クノッソス宮殿からは両手にヘビを握っている大地母神像も出ている。パルテノン神殿の梁には巨大なヘビが神殿

の主として飾られていた。森があったギリシャ文明の時代には森の中にヘビがいて、その中で暮らしていた人々はヘビを飼い、ヘビを神様と崇める世界だったのである。

著者は小さいときから、「梁の上にいるヘビを殺したらあかん。それは家の主だ。ヘビは家の主だからむやみに殺してはあかん」とよく言われた。このギリシャやローマ文明の人々もっていた多神教が信仰されていた世界観というのは、じつは日本人と同じだったのである。日本ではキツネやタヌキ、ウサギやシカなどの生息地が里山と重なっている。もちろん第一義的には、殺生を禁止した仏教の影響があるが、人間と動物の親しく接する環境が長いあいだ維持されてきた。

ところが高度経済成長期を境に、儲けるためなら何をしてでも良いという方向に突っ走ってしまった。里山が荒廃するようになると、動物と共存しているという日本人の心も急速に失われてしまったのである。

「森の民の心」の継承

戦後70年は、日本人のアイデンティティーとか、日本民族のアイデンティティーというのが急速に失われた時代である。日本はアメリカをモデルにしてきたが、アメリカのような民主主義国家にはなれていない。やはり、多民族国家・階級支配の国アメリカとは違う。日本の日本たる由縁・日本の文化の核・日本民族の核となるものかは何なのかということを、今こそしっかりと問い直し、日本人の手になる新たな世界史像を構築することが必要なのである。

第8章 環境生命文明論

生命文明の時代を構築する

地球は、巨大な銀河系のほんの端に位置する太陽系の第三惑星である。こうした太陽系のような惑星が銀河のなかに138個もある。さらに、このような太陽系を含む銀河系が、宇宙の中に10の12乗個もあるという。その中で、確実に生命が見つかっているのは、今のところ、私たちが住む地球だけである。

地球は6億5,000年前には氷に覆われた時代があり、2億5,000年前には海洋生物が大絶滅したことがあった。また、6,500万年前には隕石の衝突によって恐竜が絶滅する大事件もあった。恐竜が絶滅したあと、今度は私たち哺乳動物が地球を支配するようになる。地球上の生命は何度も絶滅の危機を繰り返したが、「生命の連鎖」が維持されてきたのである。このほんの小さな太陽系第三惑星の地球の一点にだけ「生命の連鎖」が維持されていることに、神の存在を予感することが必要な時代ではなからうか。

これまでの科学は、近代ヨーロッパの文明に表象される物質エネルギー文明であった。アメリカの大量生産、大量消費の文明は、物に満ちあふれた物質エネルギー文明の究極の文明である。ところが、この現代の物質エネルギー文明が今、地球環境問題で行き詰まっている。近代ヨーロッパの科学である物理学や化学、普遍性を追求する科学、これこそが現代の物質エネルギーを支配し、発展させてきたのであるが、この物質エネルギー文明だけでは切り開けない。人類はもはやこの地球に生き残れないところまで来ているのだ。

それでは、次の新しい文明を作るにはどうしたらよいのか。物質エネルギーを離れたハイパーソニック・エフェクトと呼ばれる超高周波が、新たな生命科学、健康科学を構築する「生命文明の時代」の可能性が注目されている。なぜ、この地球にだけ生命の連鎖が維持されているのを研究する「地球生命科学」が主流になるであろう。その「生命文明」の時代を作る立役者こそ日本であろう。

森の環境に育った天台宗の最澄は、天台本覚論で「草木国土悉皆成仏」と指摘している。森の命の輝き、森の命の音が私たちの身体や心に大きな影響を与えていることが明らかになりつつある。

日本人は縄文時代以来、ずっと森の中で暮らし「生命の法」を見続けてきた。縄文人にとっていちばん大切なものは生命である。一例として、縄文人は死んだ子供の足型をとって形見とし、母親の自分が死んだときにその形見も一緒

に墓に埋葬されている。

縄文の社会は、自分の命だけでなく、木の命、虫けらの命、へびの命、あらゆる生きとし生けるものの命に畏敬の念をもっていた。縄文時代は1万年以上続いたが、その間に人と人とが集団で殺しあった戦争は一度もなかった。それは縄文人が森の中で暮らし、森の高周波音を身体いっぱい毎日浴びていたからではないか。

アミニズムの復権

「アミニズムの心」と「慈悲の心」「利他の心」をもっとも強くもっているのは稲作漁撈民である。稲作漁撈民はコメを作るとき、自分の田んぼに入った水は次の人がちゃんと使えるように送水しなければならない。上流から中流そして下流の人々が水の循環系を維持しながら暮らさなければ、この稲作漁撈社会は成り立たない。

これに対してムギを作る畑作牧社会は、多くが天水農で自分のものであるから、他人のことを気にしなくともよく個人主義が広がった。

ところが戦後の日本の社会では、若者の多くは農村を飛び出して都会に移住した。都会に集中して暮らす人々は、人と人が助け合いながら生きていくという共同体としてのコミュニティを失ってしまった。世界第三の経済大国と云われながら、年間3万人以上の自殺者が出るのは、まさに水によって人と人がつながり、生命の交流を図り、相互の命を輝かせていた稲作漁撈社会が危機に直面していることを物語っている。

稲作漁撈社会はアミニズムの世界観で培われた「慈悲の心」「利他の心」が、とことんまで殺し合いすることを回避する。しかし、超越神としてキリストを拜むスペイン人やポルトガル人は、マヤ文明やアンデス文明を崩壊させた。中国を4,000年前から支配している漢民族は、一度も植林をしたことがなく、中国の森林は徹底的に破壊された。1620年以前の北アメリカはネイティブアメリカンの居住地で森の大国だったが、アングロサクソンが北アメリカの大地に足を踏み入れるや、アメリカの森は300年間で80パーセントが破壊された。

その中で先進国では唯一、日本人だけが不毛

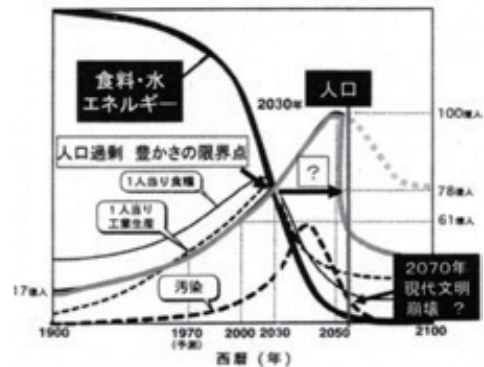


図1 現代文明崩壊モデル (安田 2005)

の大地を豊かな大地に変える喜びを覚える心を持ち続けている。その豊かな大地に変える喜びを、中国人、アメリカ人がその価値の重要性に目覚める日がくることを信じて、植えつづけなければならない。そうしないと地球の森は2050年には危機に直面し、現代文明は2070年には崩壊の危機を迎えるであろう。

2050～2070年頃に現代文明は崩壊する

現代文明はこのままでいくと2050～2070年頃に崩壊するというのが、著者の仮説である。2030年が現代文明の豊かさの限界であると予測する。それでも人間の欲望は止まらない。そして、人口が100億人近くになる2050年から地球システムが怪しくなり、2070年までの20年間におそらく地球の人口は半減する(図1)。

この仮説のモデルになったのは、40年前にドネツ・メドウズとデニス・メドウズ夫妻が描いた「システム・ダイナミックモデル」である。2005年にデニス・メドウズは、「この危機を回避するには『慈悲の心』をもつしかない」と言っている。その「慈悲の心」を強くもってきたのが、アミニズムの心を持った私たち日本人と稲作漁撈民である。

20世紀末に社会主義社会が崩壊すると、世界は伝統を無視した個人の欲望を中心とし、「過去に対する感謝と未来に対する責任を負わない」市場原理主義に支配された。これまでは水だけは市場原理には乗りにくかったが、21世紀の地球温暖化の中で、水も金儲けの対象になって危機に直面することになってしまった。

市場原理主義の横暴を押しとどめ、世界を良心ある市場原理主義の変えていけるのは、稲作漁撈民において他にないであろう。

農山漁村が未来を生き抜く力を与えてくれる

21世紀の地球環境と人類の危機を救済するために、「バックキャスティング」という、いかにも欧米人が好みそうな未来戦略がある。未来の理想社会を設定して、その理想を実現するためにはどうしたら良いかを考えるのだが、日本人にはむしろ、過去から現在を見て未来を予測する方がふさわしいのではないか。

日本の農山漁村や地方都市には、数千年にわたって築かれてきた美しい自然風土、豊かな水資源、美德、伝統文化、伝統工芸、芸能、祭り、自然との関わりの叡智、人と人との関わりのコミュニティの在りかたなど、眼には見えないが日本人の活力になる地域資源がある。

地域資源を21世紀の地域再生の活力源と見なして、賢く利活用することによって、地域を再生し、日本の底力を覚醒させる必要がある。これまでの地域再生プロジェクトというと、一品一村運動があったが、これでは国家戦略はおろか新たな自然と人間が共存可能な持続型文明社会の構築には到達できないであろう。

ローカルな叡智が、ひいては21世紀の地球環境問題の解決と持続型文明社会の構築に大きく貢献できることを地域の住民が自覚することにより、はじめて地方の活力が生まれるであろう。

生命あふれる日本の農山漁村にこそ、21世紀の生命文明の時代を創造する叡智が残されているのである。(完)